

## ROSEリポジトリいばらき（茨城大学学術情報リポジトリ）

Title	作文教育研究論文目録稿(十七)
Author(s)	[記載なし]
Citation	読書・作文(2): 22-23
Issue Date	1971-10-31
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10109/8639">http://hdl.handle.net/10109/8639</a>
Rights	

このリポジトリに収録されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作権者に帰属します。引用、転載、複製等される場合は、著作権法を遵守してください。

お問合せ先

茨城大学学術企画部学術情報課（図書館） 情報支援係  
<http://www.lib.ibaraki.ac.jp/toiawase/toiawase.html>

作文とは何であるか、といふやうな定義は、やはりある程度迄考察だけはしておかねばならない。……私はそのを、もっと明確なものにした。「作文とは作者の自己の思想生活の文による表現である。」と言ひたい。……文は唯、形式のみによつて価値あるものでない、内容が結局決定する。併し、その内容も、作者の自己の生活上の体験が決定する。形式はこの内容を装着するものである。この意味での自己であり、思想生活である。故に又、この意味での思想生活は、この意味でさへあれば如何なる範囲をも作文的内容とすることが出来るのである。

数学的材料であらうと化学的材料であらうと、この一面から捉へ得た時、すべて作文の内容である。厳密

に自己の生活の上に立つ時、又何物をも排除してはならないのである。又そこに作文の価値が決定される。

それ故に放漫な模倣や、無反省や、自己忘却や、安易なる自己満足は許されないのである。表現といふこともこの故にこそ真の意義を有し、価値が生ずるのである。文といふ形式の発展も此処から出発する。……

作文は文をうまく書く練習だの、手紙をうまく書くやうになる練習だの、と考へてゐる作文概念は末の末で、先づ基礎立脚地の移転をしなければならぬ。作文の目的は作者が自己を知り、自己の思想(広義の)生活を高め(或は深め)るにあるのである。……

私は作文指導者の考へておかねばならない最も抽象的私観として不完全ながら以上の如く考へる。

それでは右の知識を以て、實際指導は如何に為すべきに移るのであ

作文教育研究論文目録稿(十七)

作文能力の發揮をささえるもの

森久保安美「作文教育」1

作文の基礎能力とは何か

小松原功得「同」同

形式と内容の両面から

斎藤英夫「同」同

作文の基礎能力について

伊藤堅一「同」同

中学校における作文の基本的能力

戸高 素「同」同

作文教育について思うこと

西村省吾「同」同

作文指導の問題点

長沼治「同」同

ささやかな私の歩み

高橋照一郎「同」同

取材指導について

笠 文七「同」同

教科書の作文教材の取り扱いの研究

小山逸雄「同」同

るが、その前に尙考へておかねばならぬことが幾つかある。第一は教師自身の生活に就いてである。右のやうな作文の根本概念が、単に知識として頭に入っただけでは、まだ實際指導に手は附けやうがないのである。単刀直入に言へば、指導者が所謂因襲的な伝統的生活から自身を先づ脱出させねばならぬ。

我々は伝統にいい隠家を発見してゐはしないか。生徒の生活を指導すると言ひながら、我々自身は行詰つてゐて、それを仮に正として妥協してゐはしないか。「人生は行先が見えてゐる」などと考へて、安んじてゐはしないか。我々は生活開拓の努力を今も尙真剣に続けてゐるか、生活の苦悶を有してゐるかを反省して見なければならぬ。そして我々自身を先づ生活の深化、生活開放の先駆者たらしめねばならぬ。ここに於て始めて、指導者としての働きが出来

るのである。これなくしては如何なる指導方法の巧妙も、知識の豊富も些かの用をなさないものである。

で、實際的に言へば、先に述べた作文の意義等よりも、この教師の生活態度が最根本要件なのであって、事実、この絶えざる生活の闘士である教師の胸には、生徒の作文を前にして自ら、作文とは何ぞやの疑問が熾烈に湧き起つて来ざるを得ないのである。突っ込んで云へば、教師自身が作文体験の生活を嘗まねばならぬのである。

翻つて、指導に於ても、この教師自身の真剣な歩みが自ら生徒に映るものである。そして又この他に生徒に与へる確かな光はないといつてもゐる。

蓮田論文はこのあと、指導者としては生徒の自発性を重んじてゆくべきだと述べている。作文教育の要点が明言されたのである。

口頭作文ははたして必要か

野村 由「同」同

作文の基礎能力をめぐって（座談会）

石井庄司「同」同

○昭和四十一年

作文の学習とその指導

西脇良三「山口大学教育学部研究

論叢」14（第3部）

表記法の指導と正誤の規準

永野 賢「言語生活」174

作文教育における自由と規範の問題

—— 作文教育の歴史的変遷 ——

中内敏夫「児童心理」20—6

作文能力の学年的発達とその指導

サノ沢節「同」同

作文指導における具体的指導の力点

—— 低学年

安保憲一「同」同

文学教育としての作文教育

石森延男「同」同